

令和6年度

第2回静岡市立清水看護専門学校関係者評価会議 議事録

日 時 : 令和7年3月13日(木) 15時30分～16時30分

場 所 : 静岡市立清水看護専門学校会議室

司 会 : 事務長 志田訓広 書記: 玉木恭子 今井弓珠

出席者 委員長: 櫻井郁子 委員: 水谷美由紀 浅沼 勉

教 職 員

校 長: 上牧 務 副 校 長: 佐野繁子 事 務 長: 志田訓広

看護学科 教 務 長: 和田 愛 教務主幹: 松本めぐみ

教務主幹補: 木下真理子 玉木恭子

看護教師: 今井弓珠 西谷沙紀 亀山美穂 高野祐志 井出美也子

石島祐美 森 康太 岡村恵乃

助産学科 教 務 長: 池村さおり

看護教師: 稲川由美 山本智美 深澤絵里

< 校長挨拶 >

目的に沿って会議を進める。今日は、よろしく願いたい。

< 評価委員の自己紹介 >

櫻井郁子委員長(公益社団法人静岡県看護協会常務理事)

水谷美由紀委員(静岡市立清水病院看護部長)

浅沼 勉委員(清水看護専門学校後援会会長)

司会(事務長)

渡邊昌子(静岡県訪問看護ステーション協議会会長)委員は、本日所要のため欠席である。

渡邊委員より事前に意見をいただいております、意見交換時に紹介する。静岡市附属機関設置条例第7条の規定により、出席が委員の過半数であり、今回の会議を成立とする。

本校の職員を紹介する。

では、ここから議事の審議に移らせていただく。櫻井委員長に司会進行をお願いしたい。

< 学校教員の自己紹介(教育課程編成会議に参加以外の教員) >

教員の自己紹介(助産学科)4名: 池村・稲川・山本・深澤

櫻井委員長: 学校側から令和6年度自己点検・自己評価結果の最終結果報告をお願いしたい。

1 自己点検自己評価の最終報告(佐野副校長) 資料1参照

事前に配布した自己点検自己評価の最終結果について報告する。今年度の自己点検・自己評価の目標は、①学習しやすい環境の整備と活用②働きやすい環境の整備③本校の魅力(両学科あるよさの活用・清水病院との連携)の強化、以上3つである。中間評価以降も全職員で取り組んできた。送付させていただいた資料が、学校職員で評価した自己点検・自己評価の結果である。

今年度の目標に沿って、中間評価以降の取り組みについて報告する。

学習しやすい環境の整備と活用について、昨年度より使用頻度の高い場の空調修繕をすすめ、台風10号により破損した玄関エントランスホールの庇を修繕した。後援会の協力を得て整備した学生が無料で使用できるカラープリンターは、両学科で有効に活用している。次年度は、空調修繕完了する。看護学科では、3年生の看護技術の統合の授業で、学生の実習体験が少ない状況を抽出し、リアルな患者を演じてもらうよう静岡医療コミュニケーションの協力を得た。12月の実施は学生にとって実習を終えた今の自分を見つめ、看護師として働く自分を意識する機会となり、看護教師にとっては学生の成長した姿を確認する機会となった。学生が3年間で経験する技術の中に、思考・判断を問う授業展開とタスクトレーニングとバランスをとりながら教育方法の工夫をしていきたい。シミュレーションモデルのパソコン修繕の予算確保ができた。助産学科では、ディプロマポリシーの達成に向けて学生への動機付けに加え、講師と授業前の調整を強化した。結果、講師の80%程度がディプロマポリシーを意識して授業を行い、学校と検討・相談できたと回答があった。学生からは受講した講義が、今後の講義や演習・実習に活かせるものであったかという質問の評価の平均は5点満点中4.6と高い評価であった。周産期メンタルヘルスの講義で学んだ「気づく・つなげる・支える」というケアの意味を、子育て支援センターの授業での子どもと母親との関わりから得た学びとして表現していた。また、家族の心理・社会学の演習で沐浴指導と家族計画の指導方法のひとつとしてパネルシアターを作成しリフレクションした体験を活かし、実習で褥婦への指導の一部にパネルシアターを用いた。褥婦の目線や反応の違いから疲労している中でも褥婦が参加し関心をもてる関わりを実践から学んでいた。シミュレーション教育として臨床判断演習では、デブリーフィングガイドを準備し行い、何を振り返るか焦点化された。また、今年度7・8月に1つの病院を加え、学生の体験を確認し学びの保障、分娩数の見通しを得た早期の実習期間延長、夜間・週末の指導体制など実習施設の協力を得て、12月に全員が10例の分娩介助を行えた。新教育課程を終えた2年前の卒業生アンケートでは、依頼方法を工夫し回収率が85%と約20%増加した。回答した全員が教育内容が卒業後活用されていると返答した。引き続き、講義・演習・実習とつながりをもって活きる学習となるように環境づくりをしていく。

働きやすい環境整備については、看護学科・助産学科・事務担当者でタイムリーな情報共有と相談や仕事の優先度を確認し調整の機会を継続した。両学科・事務職で年度末に退職者がおり、早期から引継ぎを行っている。看護学科は、新教育課程による授業時間の増加や実習施設の変化により教員が複数の施設で実習指導する機会の増加などから令和7年度に実習指導教員1名を要望した。再要望も行ったが、認められなかった。人員増は困難性が大きいですが、引き続き、模索する。次年度専任教員養成講習会に2名参加予定である。引継ぎを行い、必要な臨床研修をすすめ、看護学科1名及び長期研修中の会計年度職員の看護教師の確保に努めていく。助産学科では、長期間となる

学外での仕事中の情報共有と効率化を目指し、自治体テレワークシステムに2名登録し、1月以降在宅ワークを行った。次年度通信環境整備及び手続を行い実習施設での運用を目指す。

本校の魅力の強化について、2つの学科があるよさを活かす取り組みでは、看護学科が新教育課程で科目として位置づけた看護研究では、3年生が実習体験をケーススタディとしてまとめて発表した。1・2年生に加えて一部の助産学科の学生も参加し、質問もあった。助産学科の学生の看護研究発表に、看護学科の学生の参加は継続している。看護学科の母性看護学実習Ⅰで女性の一生の中で起こる妊娠期、産褥期、更年期にある対象への関わりを看護学生が計画して実践し、助産学科の学生3名を交えてリフレクションを行った。大切にしたいことを確認し、その後の実践が変化した。これらも、キャリアを考える機会になっていた。引き続き2学科あるよさを活かした取り組みと情報発信に努めたい。清水病院との連携強化について、看護学科では、臨床指導委員会で、指導者が提案した、学生が看護師に報告をしようとしているがなかなかできない、看護師は業務が忙しく学生になかなか声がかけられない状況に注目し、指導者間での意見をもって看護教師を交えて行った。学生が看護師の顔を認識できる工夫、学生と看護師の認識のずれが生じやすい状況をふまえて言葉にして確認する関わり、学生が関わるスタッフへの浸透など次につながる機会となった。次年度の病院の体制について情報共有し、連携強化に努めたい。助産学科では、健康教育演習で両親学級の実施を、清水病院を利用している参加者に行う機会を得た。参加者の反応から興味・関心を引き出し伝える関わりについての手ごたえと課題を見出していた。また、母児救命の授業で昨年度導入されたモデルを使ったシミュレーション教育の充実を目指し、講師・教員・病院看護師と昨年度の課題をふまえて、事例設定を含めリアルな状況で演習を行い、その後の実習で活かしていた。魅力の発信は、両学科ともホームページの内容や更新と在校生の協力を得たオープンキャンパス、看護学科はインスタグラムや母校訪問、ボランティア活動など行った。高校の新教育課程評価をふまえ推薦要件を変更し周知した結果、該当した受験生があった。受験者数が20%程度減少し、入学生は90%程度の見込みである。助産学科は、昨年度と同様の受験者数があった。分娩数の減少及びハイリスク妊娠の増加、助産師不足に伴う指導体制整備状況をふまえ、卒業要件に関わる10例の分娩介助及び継続事例の展開を保障できる入学者数となる。

今年度、卒業生の就職について、看護学科は静岡市内85%、助産学科は静岡市内57%、実習協力を得た中部地区の病院に29%であり、学校の使命を果たしている。来年度は、看護学科・助産学科は新教育課程で学んだ学生がはじめて入学する。18歳人口が減少し大学志向が高まり学生確保が困難な中、現場の看護師不足は増えています。看護教師の人材確保も難しく、医師の働き方改革や変化する地域医療構想がある中に看護学校がある。静岡市の看護専門学校あり方検討会は継続している。30周年記念事業として、多様に活躍している両学科の卒業生を招き、看護の未来や学校の未来に向けて考える機会となるようシンポジウムを検討している。学生がキャリアを考えていくひとつの機会にもしていきたい。また、看学祭でブースを設け、地域の方々に発信していく。

報告は以上である。

2 意見交換

櫻井委員長：令和6年度最終報告を聞いて、皆さんからご質問ご意見をいただきたい。

水谷委員：Ⅱ学校運営 8情報システム化による業務の効率化が図られているかにおいて、助産学科は在宅ワークを導入しているということだが、看護学科の方はどうか教えていただきたい。

Ⅲ教育活動 7授業評価の実施・評価体制はあるかの授業評価をして結果を次年度に活用しているという点について。講師の立場では授業の準備の際にディプロマポリシーを踏まえ、前年度の授業の評価なども活用している。しかし、それが適切かという不安もある。学校から、前年度の学生評価や国家試験内容等を踏まえて、授業方法や内容について具体的な要望等をもらえると良いと感じている。

XI国際交流で、助産学科では来年度海外医療の実際を現地とリモートで結ぶ講義を計画しているとあるが、想像がつかないので、どのように実施する計画なのか決まっている点があれば教えていただきたい。

学校運営の全体に関わることとして、やはり、教員の人員不足は大きな課題であると感じた。新カリキュラムで、実習施設も多様化している状況で、人員も必要であろうと予測する。また、学生一人ひとりに丁寧に対応していく必要性も出てくる。そのため人員を増やしたいと考えていると思うが、リクルート活動をしていても厳しいと聞いている。病院に教員希望者もいるが、病院の人員不足も深刻であり送り出せない現状がある。しかし、看護師の人員確保は学校がなければ成り立たない。その点では、できるだけ協力していかなければならないと思っている。病院スタッフよりも教員に向いていそうな病院の看護師もいる。そういった人たちを方向転換していけると良いと考えている。

櫻井委員長：今のご意見・ご質問に対して、学校側からはいかがか。

佐野副校長：学校運営の情報システム化が評価3になっている中で看護学科の取り組みについては、情報を一元化しすぐに探せたり次の担当者が活用できるように取り組んではいるが、まだ途上であり、教務会議等でも促しをしている。助産学科で来年度は実習場で自治体テレワークシステムの活用した状況を見ながら、10日継続して学外での実習指導がある看護学科の活用について検討したいと考えている。

和田教務長：Ⅲ教育活動の授業評価については、学生からの評価を教員間で共有し、講師が変わる際などには学生からの要望なども伝えていきたいと考えている。

池村教務長：XI国際交流の海外医療の実際を現地とリモートで結ぶという点について、地域母子保健の科目の国際母子保健の担当講師が、家庭の事情で来年度に海外に移住されることが決まっている。その講師とのやりとりでは、移住先の母子保健について講師の体験を活用しながら学ぶ予定である。講師とは、実際の様子を動画で映しながらリモートが可能か相談している。実際にどこまでできるのか未知な部分が多いが、貴重な機会であり海外での母子保健の活動を学生に見せられたら良いと考えている。

浅沼委員：子どもが無事に卒業し感謝している。卒業式に出席して、3年間の中で、途中で辞めた学生も来ており良い雰囲気だったと感じた。特にこの学年はコロナ禍で中高生時代は修学旅行が海外から日帰り遊園地になるなど苦勞し、人間関係が希薄であった。その中で、仲間とあれだけの関係性を築けたのは素晴らしかったと感じ、感謝している。

一方、教員の働き方改革はどうなのかが気がかりである。ものを教えることはもちろん、相手に

失礼にならない、事故が起きないように、調整の業務も多く大変だろうと思う。教授するのは、はじめの一步を提供して、後は学生が学ぶという自身のイメージだが、そうはいかないとも思う。実習の期間、担当教員は自宅での業務は可能なのだろうか。授業は時間数や座学などの決まりがあると思うが、例えば1・2年生同時に実施すれば回数が増やせる、などの工夫は可能なのか。1年生で受けなければならないという進捗もあるのかもしれないが、工夫できることもあるのではないかと考えた。現在も、議事録を手作業でパソコンに入力しているが、アプリを使用するなど、それだけでも、今日の帰宅時間が1・2時間違うのではないだろうか。教員の小さな負担を減らして、その先に学生がいて、充実した教育につながると思うので、頑張りたいと思う。

櫻井委員長：今のご意見に対して、学校側から何かあるか。

木下教務主幹補：教員の働き方についてわかっていただく保護者の存在はありがたい。看護師の仕事をしていても看護教育の現場では、教授するための知識を再度正しく学び直す必要があった。教授する段取りを行い、工夫するなど授業計画を目指している。実際、外部と交渉・調整時間が膨大になっている。実習においては実習施設の方、講義においては講師との電話やメールでの調整は煩雑であるが、必要であり計画的に進めている。浅沼委員の提案にあった合同学年による講義は、3年間のカリキュラム上現在は難しい。人材は必要最小限であるが、この人材でやれることをやっていくのが現状である。私自身は、教育の仕事は楽しいため、やりがいを感じ、そこで報われていると感じている。ご配慮いただきありがたい。

上牧校長より当病院に就職する学生の思いなど気になっており、浅沼委員が子どもの就職先を決めた経緯を説明した。

櫻井委員長：中間評価と最終評価の評価点が大きく変化はなく、一部「3」評価であるが多くは「4」の評価であり、努力と工夫がみえて良い。全体としては、浅沼委員からもあったように、教員が心配になる。評価を読んで新しい取り組みや工夫・改革などとても色々な内容をしていると感じた一方、これだけのことを日々行っていく教員の大変さが想定できた。来年度は、人材が増えない状態で教育がスタートするため、負担の程度や環境なども考えて、省けるところは省く、簡略化するところは簡略化する、など考えながら行って欲しい。追加と廃止のバランスを考え、看護教育を行って欲しい。

今年度、新カリキュラムの学生が卒業した。様々な場所をお願いしているが、静岡市立は病院と連携が取れると思うので、是非旧カリキュラムと新カリキュラムの卒業生で何か違いがあるかなどを含めて評価をしていただきたい。国も新カリキュラムするために、様々な試行錯誤をしてプログラムを組んでいる。そのプログラムが実際にどうであったのかの評価が必要である。静岡県看護協会としてもその評価について教えてほしい。

今後、学生確保は少子化などによって難しくなる。どのように確保するかに加え、もう一つ大事で私たちが考えなくてはならないことは、看護を目指した人を辞めさせない、病院に看護職として採用した人を辞めさせない点である。採用の段階でその人の人となりや学習効果などは見えない。今後、看護師を増やしていく事は難しい中で、病院と連携をしている学校であるからこそ、病院と連携をしながらどうしていくのかを考えて欲しい。

そのために、今後重要になっていくのがリフレクションであると考えている。貴校ではチューター制を

とっている中で、振り返る中で人から意見をもらうことは学習効果が高い。教員から指導されるより、仲間からの投げかけで学生自身の考え方が変わる機会になる。教員の働きかけの工夫も必要になってくる。是非、今後も続けて行って欲しい。

西谷教師：カリキュラム改正後、母性看護学は母子から地域で暮らす女性とその家族へと対象が幅広くなった。母性看護の方法Ⅰでは女性の一生をテーマにシミュレーションを組み2年目となった。その中で助産学生とのリフレクションは看護学生の視野をぐっと広げることに繋がった。看護学生の振り返りのコメントを紹介する。「助産学科の方の、『私たちはお母さんの人生のほんの少ししか関わることができない。』という話からこの短い期間での私たちの関わりは対象の問題解決をすることも大事だが、今後も家族と過ごしていく方に対し、どのようになって欲しいかの目標に向け対象だけでなくその家族も含め様々な角度から支えることが大事だと学んだ。」とあり、助産学生の発言が看護学生の振り返りのきっかけとなった。また、助産学生のずっと母親の視線に合わせて座る、対象の気づかないところで衣類をたたむ、胎内にいる赤ちゃんへも話しかけるといった、看護師として培ってきた振る舞いに触れ、人としての尊厳を学んだという感想もあった。協働し、ともにリフレクションする機会が、視点の深さだけでなく、倫理観の育みにもつながった。両学科がある良さを活かし、次年度も継続していきたい取り組みと考えている。

また、3学年の交流会では、安心できる環境で学習し続ける姿勢を養いたいと思い、今年度は3学年縦割りのチューターグループで学習を積み重ねた。1回目は学習方法、2回目は学習の見直し、3回目は国家試験対策についてと3回の交流会で様々な学習方法について話し合った。教員が介入するよりも、先輩からアドバイスをもらえる機会は、話題が広がり、就職や実習、日々の小さな悩みまで打ち明けられる場となり、学校で過ごしやすい環境が生まれたように思う。

佐野副校長：渡邊委員より事前にいただいた意見を紹介する。

自己点検・自己評価最終結果を確認した。点検項目は評価点「4」点であり、「3」点となった小項目が全体で4つという結果からも教職員の目標に向けた取り組みによって達成されていると理解した。学生募集においても説明会・相談会の参加や高校訪問、ホームページの工夫、学生の協力も得ており、さまざまな努力が読み取れた。最終結果について異議や質問はない。

櫻井委員長：これで終了する。

事務長：教員の確保、働き方改革、学生確保などのご意見をいただき、来年度の運営に繋げていきたい。議事録はまとめた後、委員長に確認後に全員に配布する予定である。本委員会は1年任期であるため、3月中に次年度についての依頼を予定している。

以上で、会議を閉会する。